自傷行為への遭遇体験と精神的健康の関連

田中大輔¹・谷秀次郎¹・高橋あすみ¹・青木佐奈枝²

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²筑波大学)

キーワード：自傷行為・BDI-II・SUD

The relation between the encounter with self-mutilation and mental health

Daisuke TANAKA¹, Shujiro TANI¹, Asumi TAKAHASHI¹, Sanae AOKI²

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Tsukuba Univ., ²Tsukuba Univ.)

Key Words: self-mutilation・BDI-II・SUD

目 的

一般学生の 3～20%程度に一度以上の自傷行為が認められると言われるほど、青少年の自傷行為は増加傾向を示している(山口ら, 2004; 松本・山口, 2005; 岡田, 2005; Izutsu et al, 2006; 伊尻, 2009; 濱口ら, 2009; 岡田ら, 2010 ほか)。自傷行為は必ずしも自殺行為と直結するわけではないが、ことに若年層では自殺既遂以前に未遂行為をとる者が多いことが指摘されており、自殺予防を考える上で重要な問題となっている(内閣府, 2014)。自傷行為については、当事者やその家族の他に、当事者の周囲にいる同年代の若者にも大きな影響を与えていることが予測される。青年期の自殺や自傷の特徴としては、周囲からの影響を受けて行う、いわゆる「同調型」「つられ型」が多いことがある(高橋, 2006)。インターネットで自傷について知り、自らも自傷行為を始めた例や、有名な自殺に感化されて自らも自殺に至った例なども思春期青年期に特有と言われている。ここまで極端な例ではないにしろ、専門的な知識のない状態で何の支援もなく他人の「生き死に」に関わる重大な相談や告白を受けることは一般青年と多大な影響を与えていることは考えられよう。

そこで本研究では、自傷行為者への遭遇体験、自傷行為に関する被告白体験と遭遇者・被告白者の精神的健康との関連について検討を行う。

方 法

調査協力者 関東圏内の大学生 313 名(男性 145 名、女性 166 名、不明 2 名、平均年齢 20.53±2.28 歳)。なお、分析には自傷行為に遭遇したことがある 141 名(男 57 名、女性 83 名、不明 1 名、平均年齢 20.51±2.70 歳)を対象とした。

調査内容 自傷行為の身近さ(4 件法)、知人の自傷行為者(2 件法)、それは誰で、どのように知ったかを選択式で尋ねた。更に、精神的健康の指標として、知人の自傷行為を知った時の苦悩や困惑に関する SUD (Wolpe, 1958) 11 件法、抑うつ傾向を測定する BDI-II (Beck, 1996) 21 項目を用いた。

結 果

1) 自傷行為遭遇体験数と精神的健康

知人の自傷行為に複数回遭遇したことがある群(28 名)は 1 回のみ遭遇した群(113 名)よりも苦悩度が有意に高いことが示された($t(139)=2.7, p<.01$)。

2) 自傷行為の身近さと精神的健康との相関

自傷行為の身近さについては、苦悩度($r=.24, p<.01$)、抑うつ合計($r=.25, p<.01$)、抑うつ認知的要素($r=.30, p<.01$)との間に有意な弱い相関が見られた。また、苦悩度と困惑度の間に中程度の相関が認められた($r=.57, p<.01$) (表 1 参照)。

3) 自傷行為を知った情報経路と精神的健康

知人の自傷行為を知った経路別に苦悩度・困惑度・抑うつ感の得点の高低を検討したところ、自傷行為者からの直接告白された体験の有無と認知的抑うつの高低との間に有意な人

数の偏りが見られた($\chi^2(1)=4.60, p<.05$)。すなわち、自傷行為者から直接告白を受けずにその事実を知った群には認知的抑うつが高い者が有意に多かった(表 2 参照)

表 1 自傷行為の身近さと精神的健康との相関係数

変数	1	2	3	4	5
1 自傷行為の身近さ	-				
2 苦悩度	.24 **	-			
3 困惑度	.13	.57 **	-		
4 身体的・感情的要素	.16	.09	.16	-	
5 認知的要素	.30 **	.03	.08	.69 **	-
6 抑うつ合計	.25 **	.07	.13	.91 **	.93 **

$N=141$, ** $p<.01$

表 2 直接の告白の有無と抑うつ認知的要素の高低の度数

		認知的因子		計(%)
		低群	高群	
本人からの直接の告白・相談	あり	40 (28.4)	25 (17.7)	65 (46.1)
		33 (23.4)	43 (30.5)	43 (53.9)
	なし	73 (51.8)	68 (48.2)	141 (100)

$\chi^2(1)=4.60, p<.05$

考 察

本研究の結果から、知人の自傷行為を身近に感じている場合や複数の自傷行為者に遭遇した場合は、そうでない場合と比べて自傷行為への遭遇に対する苦悩が高まることが示された。

また、谷・高橋・田中・青木(2015)より自傷行為遭遇者は非遭遇者よりも身体・感情に示される抑うつが高いことが示されたが、今回の結果より、自傷行為遭遇者においては自傷行為を身近に感じているほど悲観や自己嫌悪といった認知側面に示される抑うつが高まることも示された。自傷行為への遭遇体験と精神的健康とのネガティブな関連を示唆する結果となった。また、本研究では、本人から直接告白されずに知人の自傷行為を知った場合には、そうでない場合よりも認知面での抑うつが高まるという結果が得られた。高橋・田中・谷・青木(2015)の「自殺念慮については Twitter やブログなどで当事者から間接的な開示を受ける方が苦悩は低くなる」という結果を併せて考えると、自傷行為と自殺念慮の遭遇体験においては知り得た情報経路によって遭遇者が受ける心理的衝撃が異なる可能性は示唆された。自傷行為では自殺念慮と異なり、本人からの直接告白でなく間接的に事実を知る方が認知的・自覚的な抑うつ感が高まる可能性がある。体験の違いによる心的影響の差については更なる検討が必要である。